



目の前の患者さんを全力で幸せにする

評者 山中克郎 諏訪中央病院

総合内科の役割を描いた渾身の著作である。リストがピアノ曲「ラ・カンパネラ」に込めた熱い情熱と同じものを感じる。総合内科が担当する領域は広い。病院での診療を中心に、救急から外来診療、高齢者を中心とした入院治療、研修医教育までを総合内科医は手がける。高齢者はいくつかの併存疾患があるので、各専門医と連携しながらベストの治療を選択する。原因がよくわからない疾患の診断を任されることも多い。この場合は、いささか厄介である。

本書の各症例は、特有の症状や所見をもつ患者のコンサルテーションを総合内科医が受けるところから始まる。「総合内科医の第一声 ちょっとと言わせて!」には、総合内科医の日頃の苦勞がにじみ出ていて微笑んでしまう。

詳しい病歴と身体所見が「これってどうする!? 総合内科」で語られる。診断の8割は問診から導かれる。詳細な病歴聴取は大切である。しかしながら、患者が語る物語のどれが重要で、どれがあまり大切でないノイズなのかを振り分けることは意外と難しい。身体診察は病歴から想起された可能性の高い疾患について、特異的な身体所見がないかどうかを確認する作業である。

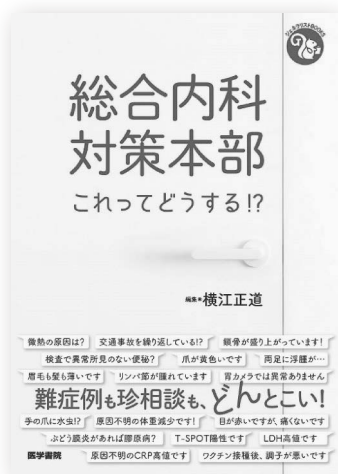
続いて「初期対応を進めるうえで必要な基礎知識」では、鑑別診断を絞り込むためのバックグラウンドとなる医学知識について語られている。守備範囲が広い内科医になるためには、さまざまな疾患に対する基礎知識が必要である。若手医師は本書を読んで、さまざまな主訴に対処するための知識を吸収してほしい。

最後に、病歴聴取と基本的な身体診察から鑑別診断のリストをどのように絞り込み、どう対応したかが語られる。「類似症例に対応するためのステップアップ」と「総合内科対策本部として次につながる tips」では、提示された症例を基に、自らの診療をどうグレードアップすることができるかが示されていて素晴らしい。裾野の広い内科医になることを夢見ている若手医師に、ぜひ手に取っていただきたい本である。目の前の患者を幸せにすることができると、チャイコフスキー「くるみ割り人形〜花のワルツ」を聴くような、楽しくて幸せな気分には医療者も包まれる。

本書の使い方として、まず病歴と身体所見から、どのような最終診断であるのかを妄想し、自分ならどう対応するのか考えてほしい。鑑別診断を2〜3個に絞る訓練となる。その後に解説を読むと、OJT (on the job training) を受けているようにメキメキと臨床能力がアップするだろう。

総合内科の仕事の多くは高額な検査を必要としない、昔ながらの診療である。DPC が重視される病院経営では、売り上げの少ない総合内科に大きな圧力がかかる場合がある。しかしながら、私たちの仕事はチームプレイであり、売り上げが少ない部門だからといって病院に不要とはならないだろう。AI時代のいまだからこそ、患者の話を傾聴し体に直接触れる、昔ながらの診療が大切になってくる。

G



《ジェネラリスト BOOKS》 総合内科対策本部 これってどうする!?

横江 正道 = 編

定価: 4,950 円 (本体 4,500 円 + 税 10%)
A5・頁 372 / 医学書院 / 2024
[ISBN978-4-260-05659-5]